

・ 国内編

3. 看取り、死別の現状分析

・ 国内編

3. 看取り、死別の現状分析

・ 国内編

3. 看取り、死別の現状分析

No.56	
終末期ケアと伝統的宗教儀礼の関わり：琉球列島における調査研究	
Author(s)	近藤功行
Article	日本公衆衛生雑誌
Vol/No/page	39/10/799-808
Year	1992
<p>伝統文化と近代医療が同居する離島における、両者の関係の公衆衛生学的な探求はまだ未発達である。</p> <p>この論文では、与論島を事例として、琉球列島の医療現場における伝統宗教要素の存在とその意義について考察している。</p> <p>調査では、「ヌジファ」と呼ばれる伝統宗教に従った遺族による抜魂儀礼の実施をかなりの遺族が希望し、沖縄県内の多くの施設（総合病院、特別養護老人ホーム、ハンセン病施設など）ではそれらが認められていた。</p> <p>与論島では自宅死亡率が高い（6～8割）が、これは臨終直前の自宅への患者の連れ戻しが行われており、この背景には琉球列島の伝統文化における人生観、死生観、祖先崇拝が見られた。</p> <p>また、特別養護老人ホームでは、伝統宗教の祭日に儀礼的な行動を行う高齢女性が少なからず存在することが示され、伝統宗教意識の強固さを示唆している。</p>	

No.57	
在宅療養高齢者の看取り場所の希望と「介護者の満足度」に関連する要因の検討:終末期に向けてのケアマネジメントに関する全国訪問看護ステーション調査から	
Author(s)	樋口京子,近藤克則,牧野忠康,宮田和明,杉本浩章
Article	厚生指標
Vol/No/page	48/13/8-15
Year	2001
<p>自宅で死亡することは常に質が高いと言えるのだろうか。一人ひとりの死の迎え方の希望を尊重するケアが求められるなかで、実際の死亡場所と介護者の満足度の関連を調査することは、介護者の看取りへの希望やケアマネジメントの考察となる。</p> <p>そこで、この研究では、全国訪問看護ステーション調査のデータを用いて、実際の死亡場所と介護者の満足度の関連を分析している。</p> <p>その結果、本人が自宅を希望していようとまいと自宅で看取った場合に、介護者の満足度は高くなっていることが報告されている。</p> <p>また、介護者の死亡場所の希望については、自宅希望群では自宅死亡の人の満足度が高くなっていたが、病院希望群では逆に自宅死亡の人の満足度が低く、入院死亡(しかも入院期間が長いほど)の方が介護者の満足度は高くなっていた。</p> <p>このことから、自宅死亡というだけではケアの質が高いとは言えないことが示されるとともに、介護者の満足度は、高齢者本人および介護者をアセスメントして、「死の迎え方」の希望に基づきゴールを設定し、終末期から臨死期への経過を予測し、段階的な死の教育や看取り方の再確認をするなどのケアマネジメントを丁寧に実施することで高められる可能性が示唆された。</p>	

No.58	
高齢者への家族の看取り時の介護行動と介護行動に影響する要因に関する研究	
Author(s)	石井京子、近森栄子
Article	日本看護研究学会雑誌
Vol/No/page	28/4/61-67
Year	2005
<p>これまでの研究は、医療者や看護師、介護士ら専門職による死にゆく人とその家族への支援についての研究が多かった。これに対して、看取りは何よりも家族が死にゆく家族に対して行う側面を強く持つものであり、この家族による看取り時の介護行動についての研究が必要となっている。</p> <p>この研究は、家族の高齢者への看取り時の介護行動を明らかにし、高齢者介護からの連続性について考察することを目的として、老人大学受講生 405 名(うち、有効回答 338 名、看取り経験ありは 222 名)へのアンケート調査を行い、分析を行っている。</p> <p>その結果、看取り時の介護行動として「直接介護行動」「死の受けとめに対する援助行動」「情緒的援助行動」の 3 つ側面が抽出されている。またこれらについては、いずれも女性の介護者の方がより積極的にこれらの介護行動を行っており、また「情緒的援助行動」については「十分に看取った」と認知している人がより積極的に行っていた。</p> <p>これらの知見は、高齢者への一般的な介護行動分析における知見と類似した結果である。また、最後まで病院での治療を選択した人は看取りを終了した後の受け止めについて十分に世話をしたという意識を持っていない傾向にあることも示唆されており、加えて、看取り時の介護行動に対する知識や技術不足がその後の受けとめに負の評価を与えていることも示唆されている。</p> <p>このことから、家族へのデス・エデュケーションの必要性が示唆されていると言える。</p>	

No.59	
在宅医療専門機関における在宅での高齢者の看取りを実現する要因に関する研究：療養者の遺族を対象とした調査による検討	
Author(s)	秋山明子、沼田久美子、三上洋
Article	日本老年医学会雑誌
Vol/No/page	44/6/740-746
Year	2007
<p>社会の要請となりつつある、高齢者の在宅での看取りを実現する要因を検討している。在宅医療専門機関の訪問診療等を利用し、在宅療養を経て死亡した療養者の介護者へのアンケート調査を実施し、在宅死に影響する要因と在宅療養や看取りにおける満足や悔いに影響する要因を検討している。</p> <p>その結果、先行研究で示されていた療養者の在宅死希望、介護者の在宅での看取り希望が在宅死を可能にする要因であるとする知見と同様の結果が得られ、さらに、療養者と介護者双方の在宅死希望が在宅死を実現する強い要因になることが示されている。</p> <p>また、在宅療養や看取りにおける満足の構成要素として、「安らかな死」「介護者の精神的安定」「医師との信頼関係」「サービス体制の充実」が挙げられていた。</p>	

No.60	
在宅高齢者を看取る家族を支援した訪問看護師の看護観	
Author(s)	小野若菜子、麻原きよみ
Article	日本看護科学会誌
Vol/No/page	27/2/34-42
Year	2007
<p>在宅高齢者を看取る家族を支援した訪問看護師が、在宅高齢者を看取る家族への支援について、どのような看護観をもっているのか記述することを目的に、訪問看護において高齢者を看取る家族を支援した経験のある訪問看護師8名へ半構造化インタビューを行い、支援における意識や看護観を分析している。その結果、訪問看護師の家族支援の目的は、「高齢者の長い暮らしの終わりを家族とともに支える」「残された家族のそれからの<生きる糧>の獲得を支える」こととしていた。そして、そのために、「家族の本当の思いを日々の暮らしの中から探索する」「家族の思いが叶うように日々の介護が続けられる状況に導く」「<家族の看取り>ができるように安心を提供する」支援を、支援の要として考えていることを明らかにした。</p> <p>その一方で、高齢者と家族の生活の場において継続的に支援を続けるためには、「人として家族に寄り添いともにある関係性を育む」必要があり、そのことは専門職として「家族により近づく親近感と訪問看護師としてあることの調和をとる」必要性を生じさせていた。</p> <p>すなわち、専門職と親近感の両立を関係性の構築の上において維持することが看取る家族への支援の基盤となっていることを示している。</p>	

No.61	
ターミナルケアにおける予期悲嘆 (Anticipatory grief) の定義に関する文献的考察	
Author(s)	小林裕美
Article	日本在宅ケア学会誌
Vol/No/page	12/1/62-68
Year	2008
<p>予期悲嘆は、「潜在的な死を前に現れる悲嘆反応」として提唱された概念であり、Lindemann による概念提示後、死後の悲嘆反応を緩和できるか否かに分析の焦点が置かれており、また近年は心理社会的、社会文化的な視点も取り込みながら研究されてきた。</p> <p>この概念を、潜在的な死ではなく、ほぼ確実に近い将来に到来するターミナルケアにおいて導入する際の概念的修正を図るために、著者はレビューを行っている。</p> <p>このなかで、ターミナルケアにおける予期悲嘆は、死別後の悲嘆とは異なり、避けられない死とターミナル疾患のために必然的に伴って現れる広義の喪失反応であり、単なる慈善リハーサルとは異なるという先行する知見に注目し、「死が避けられないと認識した時から、死へのプロセスの間の身体的、心理的、社会的そしてスピリチュアルな変化であり、避けられない死に対する喪失だけでなく、過去、現在、未来にわたる広義の喪失反応」として定義の修正と概念的拡張を図っている。</p>	

No.62	
家族介護者の続柄別にみた介護に対する意識の特徴	
Author(s)	新鞍真理子、荒木晴美、炭谷靖子
Article	老年社会科学
Vol/No/page	30/3/415-425
Year	2008
<p>2004年の国民生活基礎調査によると、在宅で65歳以上の要介護者を介護している人は、主介護者を配偶者、子、嫁に限定するとおよそ230万人。また、続柄は嫁、妻、娘、息子、夫の順に多く性別も年代も多様である。このように続柄が異なることは、介護に対する意識も異なる可能性を示しており、とくに虐待につながりかねない介護負担感の続柄別の違いの把握は重要となる。</p> <p>そこでこの研究では、続柄別の介護に対する意識の特徴を把握し、続柄を踏まえた適切な支援を検討するための基礎資料を提供するために、訪問看護ステーション利用者の家族介護者376人へのアンケート調査を行っている。</p> <p>介護に対する意識は、因子分析により「自己成長感」「対人葛藤」「充実感」「拘束感」「経済的負担感」としている。この因子得点を共分散分析を用いて比較したところ、「充実感」は嫁が一番低く、娘に比べて有意に低かった。また、「経済的負担感」は、息子が一番高く、夫、娘、嫁に比べて有意に高かった。</p> <p>これらの続柄別の介護負担感や介護意識への違いを理解した上で、介護者を支援する制度の確立が求められるとしている。</p>	

No.63	
医師と住民が望む『理想的な死』	
Author(s)	水島ゆかり、浅見洋、田村幸恵、三輪早苗
Article	日本在宅ケア学会誌
Vol/No/page	12/2/30-35
Year	2009
<p>医師と住民間の「理想的な死」のイメージや考え方の相違を明らかにすることを目的に、A 県内の医師会所属の医師と 40 歳以上の住民を対象にアンケート調査を行っている。</p> <p>その結果、死について「よく考える」「時々考える」と答えたものは、医師・住民双方とも約 7 割、死への不安や恐れを「感じる」「やや感じる」としたものは双方とも約 5 割であり、あまり違いはなかった。</p> <p>また、「理想的な死」については順位は異なるものの、「周囲に迷惑をかけない死」「苦痛・恐怖の少ない死」「長い闘病生活のない死」であった。</p> <p>医師と住民の答えが異なるものとしては、住民は医師より＜自己・他者への負担の少ない死＞（長い闘病生活が無い、お金をかけない）を望んでいた。</p> <p>このことから、医師は住民との意識のズレを認識した上で、患者の理想の死への実現に向けた支援を行っていくことが求められているとしている。</p>	